



発行所
十勝毎日新聞社
〒080-8688
帯広市東1条南3丁目
TEL(代表)0155-22-2121

編集局	0155-22-2121
編集局	0155-23-2323
広告局	0155-24-2222
販売局	0155-22-7555
総務局	0155-24-2299

実験失敗、テント破り落下

カムイパラシユート開かず 大樹・航空公園

同10時に町多目的航空公園で記者会見した伊藤副理事長は「学生の研究成果にあらわれず、誤りはない。司令室の場所や距離を再考し、今後には来年3月に行う予定。」と語った。

カムイロケット 固体燃料(フラスコを)と液体酸化剤を組み合わせたロケットエンジンで無火薬式で飛ばす。低価格で安全な小型ハイリッドロケットとして、永田晴紀北大大学院教授が理事を務めるHASTICが開発。機体は再利用可能で、従来の小型固体ロケットと比較して打ち上げ単価を10%以下に抑えられるという。成層圏のオゾン層観測など気象観測用として期待されている。

けがなし「安全に甘えあった」

「これまでの打ち上げでも失敗がなかった。試験と地上での実験でミスで非常に驚いている。失敗はロケット開発の難しさと危険性を再認識させるものとなり、打ち上げ実施責任者のカムイベースワークス(赤平市)の植松社長は落胆の表情で話した。

機体落下の原因は、機体とペイロードと呼ばれる荷物部分を切り離すタイミングが作動せず、パラシユートを押し出すことができなかったため。予定では打ち上げの15秒後に分離させるようにタイマーが設定され、パラシユートが風を受けて速度を弱めながら周辺に落下するはずだった。「原因は電子部品と思われるが、今後、道大で詳細に調べるところになる」と植松社長という。

また、打ち上げたロケットが発射点から約25メートル離れた司令室に落ちたことに関係者は責め、一時緊迫した空気が流れた。通常、ロケットの飛び出す方向の真後ろが最も安全とされているが、後方の見学者が見やすいように配慮し、発射点から横の位置に設置した。記者会見で同じく実施責任者の永田晴紀北大大学院教授は「安全に対する甘えがあったと言われているが、安全に反論するつもりはない」と反省の言葉を述べ、今後の対策として「司令室の位置を徹底し、距離を50メートル近く取ることを考えた」とした。(北雅貴)

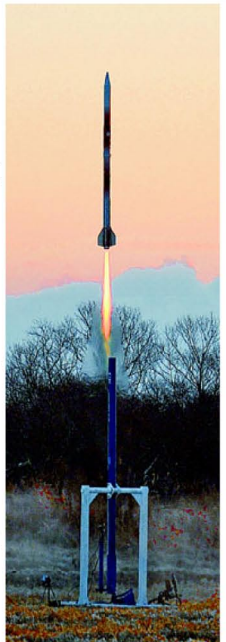
また、打ち上げたロケットが発射点から約25メートル離れた司令室に落ちたことに関係者は責め、一時緊迫した空気が流れた。通常、ロケットの飛び出す方向の真後ろが最も安全とされているが、後方の見学者が見やすいように配慮し、発射点から横の位置に設置した。記者会見で同じく実施責任者の永田晴紀北大大学院教授は「安全に対する甘えがあったと言われているが、安全に反論するつもりはない」と反省の言葉を述べ、今後の対策として「司令室の位置を徹底し、距離を50メートル近く取ることを考えた」とした。(北雅貴)



司令室のテント内に落下したロケットを掘り起こす関係者。テント上部にロケットが突き破った穴が見える(8日午前7時半ごろ、塩原真撮影)

町内の打ち上げ実験は8回目となるが、パラシユートの切り離しに失敗したのは初めて。今回は昨年同様、HASTICが公立ほぐたて未来大学の依頼を受け、実施。ロケットには同大学の3年生の学生が製作した500gサイズの超小型衛星(CANSAT)を搭載し、全長2.9m、重量21kg。実験は午前7時から行われ、勢いよく飛び出した機体は数分後にテント内に落下した。オイルを使って上空を滑る予定だった。

試験はほぼ無風状態の中、午前7時から行われ、勢いよく飛び出した機体は数分後にテント内に落下した。



発射台(塩原真撮影) 午後7時ごろ、勢いよく飛び出したロケット(植松社長という)

「これまでの打ち上げでも失敗がなかった。試験と地上での実験でミスで非常に驚いている。失敗はロケット開発の難しさと危険性を再認識させるものとなり、打ち上げ実施責任者のカムイベースワークス(赤平市)の植松社長は落胆の表情で話した。

機体落下の原因は、機体とペイロードと呼ばれる荷物部分を切り離すタイミングが作動せず、パラシユートを押し出すことができなかったため。予定では打ち上げの15秒後に分離させるようにタイマーが設定され、パラシユートが風を受けて速度を弱めながら周辺に落下するはずだった。「原因は電子部品と思われるが、今後、道大で詳細に調べるところになる」と植松社長という。

また、打ち上げたロケットが発射点から約25メートル離れた司令室に落ちたことに関係者は責め、一時緊迫した空気が流れた。通常、ロケットの飛び出す方向の真後ろが最も安全とされているが、後方の見学者が見やすいように配慮し、発射点から横の位置に設置した。記者会見で同じく実施責任者の永田晴紀北大大学院教授は「安全に対する甘えがあったと言われているが、安全に反論するつもりはない」と反省の言葉を述べ、今後の対策として「司令室の位置を徹底し、距離を50メートル近く取ることを考えた」とした。(北雅貴)

また、打ち上げたロケットが発射点から約25メートル離れた司令室に落ちたことに関係者は責め、一時緊迫した空気が流れた。通常、ロケットの飛び出す方向の真後ろが最も安全とされているが、後方の見学者が見やすいように配慮し、発射点から横の位置に設置した。記者会見で同じく実施責任者の永田晴紀北大大学院教授は「安全に対する甘えがあったと言われているが、安全に反論するつもりはない」と反省の言葉を述べ、今後の対策として「司令室の位置を徹底し、距離を50メートル近く取ることを考えた」とした。(北雅貴)